



ところどころ木が朽ちかけているレトロな雰囲気漂うログハウスの中で、黒板の前に立つ32歳の女教師と大きなテーブルを縦に二つ重ね囲んで座る8人の生徒たち。

ここは街のはずれの美術教室だ。

この日は“人物画”の描画のお勉強の時間である。

「・・・・・・・・という感じね。OK？背中では男女共通で肩と腰の部分でゆっくりと滑らかに変化していきます。女性は男性より腰部に丸みを帯びていて・・・」

黒板に簡単に見本の絵を描いて見せながら人物デッサンの基本を教える先生。

名前はユミカと言う。

ユミカ先生はミニスカートに黒い網タイツを穿いたとってもセクシーな女性である。薄いピンク色の縁の眼鏡をかけ、髪の毛はほんの少し茶色がかかり背中の中肩甲骨の辺りまで伸びている。美術の先生と言うよりは知的な科学の先生という感じだ。

「じゃあみんな、次は実際に描いてみましょうね」

「先生！！うれしいな！描いてみたい描いてみたい！！」

興味津々な心持ちが声のトーンに表れている。先頭を切って喜びの言葉を発したのは男子生徒のアキラ。スポーツ刈りの活発な少年だ。

「ううん、今日はねゲストが来てくれてるのよ。アズサ、入ってきて！」

先生が教室の扉の向こうに声をかけると・・・。

ドアノブを回す音がして、誰かが入ってきた。

「あっどうも！！あー、でもここってホント落ち着くわね。美術教室って言うより別荘って感じよ」

「アズサっ、一応今授業中なんだからちゃんと気を引き締めてよね！」

「ごめんごめんっ」

入ってきたのはユミカ先生と同じくらいかあるいは少しだけ若く見える、茶色の髪が長い女性だ。

そして、生徒たちが目を丸くしたのは“その恰好”だ。

なんと、胸元から大きな薄い黄色のバスタオルを巻いた姿で出てきたのだ。

あっけにとられてポカンとしている生徒たちにユミカ先生は言った。

「みんなびっくりしちゃった？彼女は私の大学時代の親友よ。みんなにとっては臨時のゲスト先生って感じね。アズサ先生って呼んであげて」

「でも・・・先生、ど、どうしてアズサ先生はそんな恰好なの？」

落ち着きがなくソワソワしながら、まるで刺激の強い大人の映画を見ているような表情で男子生徒のケンジが質問した。

「みんな、この教室で美術の基本についてこれまで5回の授業を受けてくれたわね？一度も休まずみんなそろって皆勤、よく頑張ったわ。だから今日はそのご褒美をあげようって思うの」

「ご褒美？」

「みんなもその年になれば興味があることは先生よく分かってるわ。最初は男の子たちが喜ぶと思うけど・・・」

先生の意図をつかめず、なおも不思議そうな表情を浮かべている生徒たちにユミカ先生は続けた。

「大人の女の人の裸をスケッチしてもらおうのよ」

「えっ！！??」

一斉に男子生徒たちの顔が赤くなる。

皆驚いているようで、それでいてとてつもなく嬉しそうな顔。

全生徒の8人のうち、男の子はユウジ、リョウタ、ケンジ、そしてアキラの4人だ。

皆顔を見合わせ、そして皆一様に胸を弾ませている様子だ。

「じゃあ・・・アズサ、さっそく服・・・脱いで」

先生がアズサに服を脱ぐよう促す。

言われた通り、彼女は背中であぐらで括られたバスタオルの結び目をほどき、一気にバサッ！！とバスタオルを脱ぎ捨てた。

ムッチムチの女性らしい体が露わになった。くっきりしており、それでいて丸みを帯びた腰のくびれにプリンプリンの巨乳。これ以上あり得ないくらいに30歳を越したばかりの妙齢のアズサの肉体は淫靡だ。

少年たちの視線は先生の肉体一点に注がれ、皆上半身を乗り出して見つめている。

「凄いでしょ？あなたたち。アズサ先生はとってもエッチな体の持ち主だから」

「じゃあ・・・ここに座っていい？ユミカ」

アズサははぎ取ったバスタオルを教室の隅っこに置いてあったかごの中へ入れた後、先生が用意した教壇の上に置かれた大き目の椅子にストンッと座った。

「じゃあ次は男のモデルさんを紹介しないとイケないわね。コウタ、入ってきて！」

ユミカ先生の掛け声とともに、今度は腰にボディタオルを巻いた状態の、筋肉質でそれでいてスラッと細身の若い男性が入ってきた。

「彼は私の教え子のコウタ先生よ。あたしが新米教師として高校で勤務してた頃、生徒だったの。年は27歳よ。とっても優しい先生なの」

「みなさんよろしく！！」

コウタはこの一連の流れにまだ戸惑いを隠せない生徒たちに向けて元気よく挨拶をした。

そして生徒たちの目がいったのは先生の下半身。コウタ先生が腰に巻いたタオルの中心部、ちょうど先生の股間の部分は、物凄く“こんもり”していて・・・。

そしてアズサと同じように教壇の上に置かれた椅子に座った。

「さあ皆・・・この二人のモデルさんの裸をスケッチしてね。男性でも女性でも好きな方でいいわ。みんな教えた通り、基本を守って描くのよ」

生徒たちは全員が落ち着かない様子だったが、先生の指示通りテーブルの上に置いたスケッチノートに教壇のモデルさんを見ながらスケッチを始めた。

書き始めてすぐ、生徒の一人のケンジが先生に言った。

「先生！モデルさん、なんだか座っていると描きにくいから立って欲しいな！」

「そうね。確かに立ち姿の方がよく見えるし、それに人物描画が初めての人にとっては描きやすいかも。じゃあ二人とも立って頂戴！」

アズサとコウタの二人がそのままスッと立ち上がる。

すると、次は女子生徒のアカネが口を開いた。

「先生、女のモデルさんは裸なのにどうして男のモデルさんはタオルを付けてるの？」

「ううん、そ、そうねえ……」

ユミカはあごに手を当てて数秒間考えた後、言った。

「そうね！じゃあ、彼にもタオルをとってもらいましょう。コウタ、お願い」

「OK！！」

そう言ってコウタは腰に巻いたボディタオルの結び目をほどき、股間をオープンにした。

「わぁ！！」

女子生徒だけでなく……男子生徒までもが驚愕したのは、コウタ先生のペニスの大きさだ。

「さすがにみんなには刺激が強すぎるかと思って彼にはタオルつけてもらってたけど、やっぱり人物描画の基本は全裸だからねっ」

生徒たちの驚きに動じることなく堂々としているコウタ。

タオルをほどいた勢いで、太ももの中間あたりまで垂れ下がった太長いズル剥けペニスが軽くブランブランと揺れている様はあまりに卑猥だ。

「みんな驚いてるみたいだけど、男の人は大人になればみんなおちんちんはこれくらい大きくなるものなの。今はブランと垂れ下がってるけど……」

「ユミカ先生、そこからはもう言わなくていいんじゃない??」

コウタ先生が口を開き、ユミカ先生を制止する。

するとユミカ先生はコウタに軽くかぶりを振って言った。

「いや……大切なことなの。だって今日はみんなに絵以外のことも勉強してもらおうって思ってるから」

「あっ、そうだったね」

ユミカはもう一度夢中で教壇に視線を注ぐ生徒たちに向けて言った。
「みんないい？おちんちんはね。ほんとはもっと大きくなるものなんだけど、今は何もしていないからこの状態なの。それでね……」
“裸の人物画”を描く勉強と“性の勉強”。
二つの未体験に、凄すぎてついていけない感じの生徒たち。
そんな皆の雰囲気を感じ取ったユミカ先生は首に手を当てて言った。
「まあいいわ。このことは後にしましょう！ひとまず絵を描くことが先決よ」

静かな緑の木々に囲まれたログハウス内のアナログ時計が午後3時をさした頃……。
ついに生徒たちが人物画のスケッチを描き終えた。
ユミカ先生は生徒たちが座る椅子の後ろを回りながら、描き終えたその絵をチェックしていく。
「いいわね。みんな本当によく出来てるわ。OKよ！！」
なんとか興奮を抑えて描き切った生徒たちだったが……もう我慢の限界！！
生徒たちが皆、次はどんなことをするのかを期待していた。
そこに、ユミカ先生のとどめの一言。
性への興味津々で期待がはち切れそうな生徒たちに……。
「じゃあ次はもっと大胆なことしましょっ！！みんな裸になってお互いの体をスケッチし合うの」

体験版はここまでです

もし気に入っていただけましたら

製品版も購入していただけると幸いです